

# ラベルワーク技法を用いた看護研究デザイン法

石橋 照子・吾郷美奈恵・梶谷みゆき・武智 佳子\*<sup>1</sup>  
高野美喜子\*<sup>2</sup>・稲本 夏江\*<sup>3</sup>・松原 峰子\*<sup>4</sup>・川原 仁美\*<sup>5</sup>  
三原 記子\*<sup>6</sup>・山崎 祝代\*<sup>7</sup>・野津 早苗\*<sup>8</sup>・児玉美由紀\*<sup>9\*</sup>

## 概 要

ラベルワーク技法を用いて看護研究をデザインする方法を考案し、精神科看護師を対象とした研修会において実施した。本方法の評価について、研修受講者47名を対象とし、無記名自記式の質問紙を用いて調査し、45名から回答を得た。その結果、「グループワークへの参加しやすさ」「取り組みやすさ」「思考の整理のしやすさ」「思考の共有のしやすさ」などの項目において、一定のよい評価を得ることができた。今後は、限られた時間内での進め方の工夫、自己学習の問題等を課題とし、より平易な方法を検討していきたい。

キーワード：ラベルワーク技法、看護研究デザイン法

## I. はじめに

看護教育に携わる者として、病院の看護研究の指導をすることがある。その際、「問題意識から研究課題へと洗練化し、さらに研究目的へと明確化していく行程が難しい」という声をよく聞く。実際、研究論文の査読をしていて、研究課題がもう少し洗練され、それに基づいて綿密な計画が立案されていれば、もっといい研究になっただろうに、と思うことがある。

このような思いから、実際に日頃臨床で感じている問題意識→研究課題→研究目的へと絞り込み、目的に添った対象や方法が選択できるまでのプロセスを、手順化し進めやすくするため、ラベルワークによる展開方法を考えた（以下、看護研究デザイン法とする）。それは、ラベルワークの手法が手順化しやすく、少人数制による思考の発信・交流を繰り返しながら知識を創

造していくのに優れた方法であると考えたからである。

ラベルワークとは、人間の知的活動、とりわけ知識の発信・交流および図解思考の道具（媒体）としてラベルを用いる理論と技術の体系のことであり、林が1994年頃から用い始めた概念である（林, 1994, 2002, 2004）。

そこで本研究では、今回考案したラベルワーク技法を用いた看護研究デザイン法について、評価検討していくことを目的とした。

## II. 研究方法

### 1. 対 象

日本精神科看護技術協会島根県支部が主催した平成18年度「看護研究」の研修会受講者の内、研究の主旨および方法等について説明し、同意の得られた看護師を対象とした。

### 2. 方 法

- 1) 無記名自記式による質問紙(A 4版1枚)を、2日目の研修開始時に配布し、研修終了時に会場出口に設置した回収箱に自主提出とした。
- 2) 調査内容の項目

\*<sup>1</sup>1.7西川病院      \*<sup>2</sup>5島根県立湖陵病院  
\*<sup>3</sup>3安来第一病院   \*<sup>4</sup>4島根県立中央病院  
\*<sup>6</sup>6島根大学医学部付属病院  
\*<sup>8</sup>8海星病院        \*<sup>9</sup>9八雲病院

〈対象者の背景に関する項目〉

①看護職資格, ②経験年数, ③参加動機

〈研修全体に関する評価項目〉

①研修内容の理解, ②研修方法全体の評価,  
③研修時間, ④今後への活用

〈看護研究デザイン法の進め方及び効果に関する評価項目〉

①ラベルのテーマの設定, ②図解のテーマの設定,  
③手順の理解のしやすさ, ④取り組みやすさ,  
⑤グループワークへの参加しやすさ, ⑥文献の整理のしやすさ,  
⑦思考の整理のしやすさ, ⑧思考の共有のしやすさ,  
⑨思考のまとめやすさ, ⑩楽しさ, ⑪満足感

看護研究デザイン法に関して, 図解のテーマの設定や手順の理解のしやすさ, 取り組みやすさなど, 進め方について項目①~④を設定し問うた。項目⑤~⑪については, ラベルワークを導入した効果として, グループワークへの参加しやすさや思考の整理のしやすさ, 満足感などについて問うた。評価方法は, 「普通: 0点」を中心とし「-3点」~「3点」まで7段階評価とした。

### 3. 倫理的配慮

本研究の倫理的配慮については, 島根県立看護短期大学倫理審査委員会の承認を受けた。具体的には以下のように実施した。

- 1) 研修受講者に研修開始前のオリエンテーション時研究の目的・方法・研究協力への自由意思について説明し依頼した。
- 2) 無記名自記式, 回収箱への自主提出の方法をとり, 個人が特定できないように配慮した。
- 3) 回収箱への自主提出を持って同意とみなした。

## Ⅲ. 研修の実際

研修は9:30~16:00まで2日間に渡って展開した。看護研究の目的・方法など基本的な知識の講義と, 看護研究デザイン法の演習を併用して行った。

看護研究デザイン法は4つのセッションから構成した(表1)。以下にセッションに沿って説明を加える。

### 1. 第1セッション: ラベル交流による研究課題の絞り込み

看護管理やセルフケアなど, あらかじめ企画者側で研究テーマを設定し, 受講予定者に提示し, テーマを選択してもらい, それによってグループ(1グループ6人)を編成した。そのテーマに関連して, 日頃の看護実践において「問題に思うこと」を30~50字程度にまとめ, ラベルを作成した(問題ラベルと呼ぶ)。問題ラベルを補足説明しながら「問題共有シート(図1)」に貼り, ラベル交流した。その中からグループメンバーが取り組んでみたいものを一つ選び「研究課題」とした。研究課題を解く重要な鍵となるであろう語を検討し, キーワードとして3~5語抽出した。その際, 話題に上がった類語も「問題共有シート」に書き加えた。

抽出したキーワードを使って文献検索し, 集めた文献をグループ内で分担し, 読んでくることとした。

### 2. 第2セッション: 文献ラベル書き・ラベル合わせによる知見の整理

少し大きめの付箋に, 分担した文献の対象・方法・結果・文献番号を書き出した。1文献の内容を1ラベルに書き表した(文献ラベルと呼ぶ)。文献ラベルの似たものを集め紙皿に貼り, ラベル群の内容を一文で表す看板をつけていった。こうして整理した文献ラベル群を研究課題との関係を考えながら「問題共有シート」の周辺に配置し, 関係線を入れていった(図2)。

### 3. 第3セッション: 図考・図解作成による研究目的の設定

作成した図解をみながら, 研究課題を中心に明らかにされていること, 明らかにされていないことを確認していった。そして明らかにされていない点の中で, 今回の研究において明らかにしようとする点を研究目的として選定した。研究目的が明確になると, 問題の性質によって自ずと方法が選定された。

### 4. 第4セッション: 発表会・評価

このように問題意識から研究課題へと洗練し, 研究目的や方法をデザインしていった経過について, 図解を用いながら発表した。それに対しよりよい研究デザインとなるよう意見交換していった。

図1 ラベルワークを用いた看護研究デザイン法

項 目	内 容
第1セッション：ラベル交流による研究課題の絞り込み	<p>8グループ（1グループ6人）に別れ、①司会、②タイムキーパー、③話が煮詰まったときに一言言う係、④「問題の共有シート」作成係（2人）、⑤環境係など一人一役係を決めてグループワークに参加する。</p> <p>ラベルの書き方を説明し、「臨床において問題（疑問）に思うこと」をラベルに書く（一人1枚）</p> <p>一人ずつ最初のラベルを読み、どうして問題だと思ったのか、どのような問題だと思っのか説明を加え「問題の共有シート」に貼る。</p> <p>全員が貼り終えたら、チームで話し合いながら、最も取り組みたい問題一つに絞る。</p> <p>問題（疑問）は、誰を対象に、何を明らかにするのか、話し合い、研究課題を決め、「問題の共有シート」の上の欄に書き込む。</p> <p>まとめの欄に、その問題を選んだ経過や研究課題を設定した経過を書く。</p> <p>選んだ問題を解く重要な鍵となる語を考え、3～5語書き出す。話し合った際に出てきた類語も併せて書き出しておく（図1）。</p>
文献検索	抽出したキーワードを使って文献検索をする。
課題	各グループで入手した文献を分担し、読んでくる。
第2セッション：ラベル書き・ラベル合わせによる知見の整理	<p>収集した文献から、誰を対象にどんな方法でデータを集め、どんなことがわかったか明らかにする（一人3枚以上）</p> <p>その内容を文献ラベルに書き、文献の番号を書いておく。</p> <p>一人ずつ最初の文献ラベルを読み、紙の皿の上に置いていく。</p> <p>似ている内容の文献ラベルを合わせ、同じ紙皿の上に置き、ラベル群の内容を表す看板をつける。</p> <p>模造紙の上に、「問題の共有シート」を置き、「問題の共有シート」の周辺に、文献ラベルを整理した「お皿」を考えながら配置する。</p> <p>「問題の共有シート」で選定した研究課題に対する関係性の強さや「お皿」同士の関係を考え、関係線を入れていく。</p>
第3セッション：図考・図解作成による研究目的の設定	<p>図解を見ながら、研究課題に対して、どのあたりが明らかになっていて、どのあたりが明らかにされていないのか確認をする。</p> <p>「私たちの目指す研究課題は」というテーマで話し合い、研究課題に対して明らかにされていない点を共有した上で、研究目的・方法を決定する。</p> <p>研究課題を、模造紙の上のスペースに書き、研究課題を絞り込み、研究目的・方法を選定していった経過をまとめ、説明文とする。</p> <p>図解記載事項として、①作成月日、②場所、③グループ名、④図解のテーマ、⑤作者を書き込み、図解を完成させる（図2）。</p>
第4セッション：発表会・評価	<p>図解を用いてグループワークの経過と研究概要を発表する。</p> <p>他のグループの図解と発表に対し、意見交換し理解を深める。</p> <p>講師からのコメント</p>

注1) ラベル交流：ラベルを用いて知識の交流(コミュニケーション)を促進すること。ラベルセッションともいう。

注2) 「お皿」：ラベルを集めて載せる紙片。カラー用紙や折り紙が用いられる。

注3) 看板：お皿に集まったいくつかのラベルが最終的に何を言わんとしているのかよく考えて、それを文章でお皿の上に記したものの。

## IV. 結 果

### 1. 対象者の概要（表2）

研修受講者47名中45名の回答があった(回収率95.7%)。看護職資格については看護師36名、准看護師9名であった。臨床経験年数について、1～2年9名、3～5年11名、6～10年9名、11～15年2名、16～20年4名、21年以上10名であった。参加動機について「上司の勧め」によ

る参加が最も多く、次いで「今研究を行っている」、「今後研究を行う予定」の順であった。

### 2. 研修全体の評価（表3）

研修内容の理解状況について、「よく理解できた」「理解できた」が27名(60.0%)で、「非常に難しかった」「難しかった」が14名(31.1%)であった。

研修全体の評価は、「非常によかった」「よかった」35名(77.8%)で「どちらとも言えない」9名(20.0%)、「よくなかった」1名(2.2%)であっ

図1 問題(疑問)共有シートのイメージ

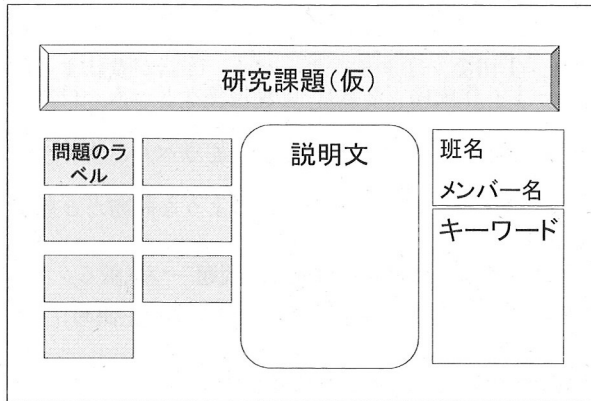


図2 拡大図解のイメージ

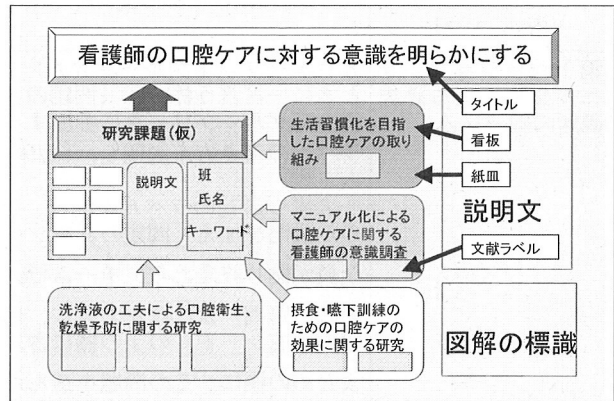


表2 対象者の概要

		n=45	
項目	カテゴリー	人数	%
看護職資格	看護師	36	80.0
	准看護師	9	20.0
臨床経験年数	1~2年	9	20.0
	3~5年	11	24.4
	6~10年	9	20.0
	11~15年	2	4.4
	16~20年	4	8.9
	21年以上	10	22.2
参加動機 (重複回答)	今後看護研究を行う予定があるため	14	31.1
	今、看護研究を行っているため	18	40.0
	日頃の看護実践に活かすため	6	13.3
	研修内容に興味があった	3	6.7
	上司のすすめ	20	44.4
	その他	3	6.7

表3 研修全体の評価

		n=45	
項目	カテゴリー	人数	%
理解状況	よく理解できた	2	4.4
	理解できた	25	55.6
	どちらとも言えない	4	8.9
	難しかった	12	26.7
	非常に難しかった	2	4.4
研修全体の評価	非常によかった	7	15.6
	よかった	28	62.2
	どちらとも言えない	9	20.0
	よくなかった	1	2.2
	非常によくなかった	0	0.0
研修時間	短かった	11	24.4
	適当であった	26	57.8
	長かった	8	17.8
今後への活用	非常に活かせる	7	15.6
	活かせる	35	77.8
	どちらとも言えない	3	6.7
	活かさない	0	0.0
	全く活かさない	0	0.0

た。

研修時間については、「適当であった」26名(57.8%)が最も多く、次いで「短かった」11名(24.4%)、「長かった」8名(17.8%)であった。

研修での学びについて、今後への活用の可能性は、「非常に活かせる」「活かせる」が42名(93.3%)、「どちらとも言えない」3名(6.7%)という結果であった。

### 3. 看護研究デザイン法の進め方及び効果に関する評価(表4)

評価-3~1を「悪い」、0を「普通」1~3を「良い」の3群に分け比較した。①問題ラベルや文献ラベルなど、ラベルのテーマの設定について、31名(68.9%)が「良い」と評価しており最も多く、次いで12名(26.7%)が「普通」、1名(2.2%)が「悪い」と評価していた。②「私たちの目指す研究課題は」という図解のテーマの設定について、31名(68.9%)が「良い」と評価

しており最も多く、10名(22.2%)が「普通」、2名(4.4%)が「悪い」と評価していた。③看護研究デザイン法の手順の理解のしやすさについては、28名(62.2%)が「良い」と評価しており、10名(22.2%)が「普通」、4名(8.9%)が「悪い」と評価していた。④看護研究デザイン法の取り組みやすさについては、28名(62.2%)が「良い」と評価し、10名(22.2%)が「普通」、6名(13.3%)が「悪い」と評価していた。

⑤グループワークへの参加しやすさについては、36名(80.0%)が「良い」と評価しており、11項目中最も多く「良い」と評価していた。8名(17.8%)が「普通」と評価し、1名(2.2%)が「悪い」と評価していた。⑥検索した文献の整理のしやすさについては、24名(53.3%)と約半数が「良い」と評価しているが、「普通」「悪い」と評価したのが10名ずつ(22.2%)であった。⑦思考の整理のしやすさについて、28名(62.2%)が「良

表4 看護研究デザイン法の進め方及び効果に関する評価

n=45

	とくに -3	かなり -2	わるい -1	ふつう 0	よ 1	かなり 2	とくに 3	無回答
①ラベルのテーマの設定	-	-	1	12	22	7	2	1
②図解のテーマの設定	-	-	2	10	23	7	1	2
③手順の理解のしやすさ	-	-	4	10	18	10	-	3
④グループワークへの参加しやすさ	-	-	1	8	22	10	4	-
⑤取り組みやすさ	-	-	6	10	18	8	2	1
⑥文献の整理のしやすさ	-	5	5	10	18	4	2	1
⑦思考の整理のしやすさ	1	3	2	10	20	6	2	1
⑧思考の共有のしやすさ	-	2	2	9	16	11	4	1
⑨思考のまとめやすさ	-	2	3	11	18	8	2	1
⑩楽しさ	-	-	1	15	15	9	5	-
⑪満足感	1	1	12	15	8	7	1	-

い」と評価しており、10名(22.2%)が「普通」、6名(13.3%)が「悪い」と評価していた。⑧思考の共有のしやすさについては、31名(68.9%)が「良い」、9名(20.0%)が「普通」、4名(8.9%)が「悪い」と評価していた。⑨思考のまとめやすさについては、28名(62.2%)が「良い」と評価し、11名(24.4%)が「普通」、5名(11.1%)が「悪い」と評価していた。

⑩楽しさについて、29名(64.4%)が「良い」、15名(33.3%)が「普通」、1名(2.2%)が「悪い」と評価していた。⑪満足感について、16名(35.6%)が「良い」、15名(33.3%)が「普通」、14名(31.1%)が「悪い」と評価しており、11項目中最も「悪い」と評価した人数が多かった。

#### 4. 記述データ(表5)

各調査項目について、評点の他に記述欄を設けた。記述意見について一覧表にして示した。感想として「よかった」「楽しかった」「満足した」「嬉しかった」「勉強になった」という肯定的な反応が多く、方法・内容について「やりやすかった」「わかりやすかった」「まとめやすかった」「進めやすかった」という反応と「難しかった」「苦勞した」「困った」という反応に大別できた。今後への意向としては「役立てたい」「見習いたい」「意欲が出た」といった前向きな反応がみられた。その他、問題意識や表現能力の問題、勉強不足など、自己の振り返りの内容がみられた。

## V. 考 察

### 1. 看護研究デザイン法の有効性

研修内容の今後への活用の可能性について、45名中42名(93.3%)が「非常に活かせる」「活かせる」と回答しており、今後の実践に活かせる方法であると考え。また、看護研究デザイン法の③手順の理解のしやすさ、④取り組みやすさにおいても、28名(62.2%)が「よい」と回答し、「今まで研究計画書作成を手探りでやっていたため、よい勉強になった」「方向がずれにくくまとめやすかった」と述べており、効果的な方法であったと考える。

一方「難しかった」と回答した人の中には、「初めてラベルワーク技法を知った」という意見があり、ラベルワークに対する戸惑いが大きかったと考えられる。ラベルワークの経験者がいるグループでは、「経験者をリーダーとしてスムーズに作業できた」とあり、満足感も高かったことから推察できる。できればメンバーにラベルワークの経験者がいることや、この方法を何度か繰り返してみると、より理解しやすくなるのではないだろうか。

また、「初め手順を間違えていた」とか「グループで勝手に進めてしまった」などの意見もあり、手順の説明の際、全体概要を示した上でセッション毎に区切って説明するなどの工夫が必要ではないかと考える。

### 2. 期待した効果と課題について

表5 記述データ

項目	記述意見
ラベルのテーマの設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>今回は6名で一つのを考えたのでまとめやすかったが、はじめの問題点が全く頭に浮かばず困った。</li> <li>ついていけるか不安だった。でも、何とかついていった。</li> <li>テーマの項目が2項目しか上がってこなかったので設定しやすかった。</li> <li>様々な意見交換ができてよかった。</li> <li>初めての方法で苦労した。</li> <li>少し難しかった。(2名)</li> </ul>
図解のテーマの設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>わかりやすかった。</li> <li>言葉の表現が難しかった。思っていることがなかなかうまく表現できない難しさを感じた。</li> </ul>
手順の理解のしやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>初め手順を間違えて理解していたが、途中で理解できた。</li> <li>その都度行き詰まったときに説明をしていただけでよかった。</li> <li>先生が順序よく説明してくれた。</li> <li>手順をしっかりしていないと後でバタバタになる。基礎をきっちり行うことが大切であると知った。</li> <li>今まで研究計画書作成を手探りでやっていたため、よい勉強になった。</li> <li>どこまでするか説明が無く、グループで勝手に進めてしまった。</li> <li>作業中に行き詰ってしまうことが何度もあった。手順は分かっている内容と照らし合わせると難しかった。</li> </ul>
取り組みやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人でなかったから分からないところを教えてもらいながら進められた。</li> <li>グループで進めることにより、いろいろな意見や考えを知ることができ、分担しながらでやりやすかった。</li> <li>自分でまとめたり、構成したりするのがとてもスムーズにいった。わかりやすかった。方向性がずれにくくまとめやすかった。</li> <li>同じ科同士の一つのことに対する取り組みはやりやすかったと思う。</li> <li>難しいが取り組もうと思った。</li> <li>難しかった。</li> </ul>
グループワークへの参加しやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>数名ですると進めやすかった。</li> <li>いろいろと意見が出てよかった。(2名)</li> <li>皆が意見を出すことができ、またその意見を聞くことができてよかった。</li> <li>説明を受けつつ話し合いにも何とかついていった。グループの中にリーダーシップを持っていてくれる方がいて参加しやすかった。</li> <li>初対面で自己紹介なしに始まり、初日は考え・行動にまとまりを欠いた。</li> </ul>
文献の整理のしやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>教えてもらい理解できた気がする。</li> <li>文献の選び方、読み方の難しさを痛感した。</li> <li>文献検索のためのキーワードが難しかった。</li> <li>文献のまとめ方が難しかった。</li> <li>テーマに格闘する文献がなかなか見つからず苦労した。</li> <li>なかなかいい文献が見つからず難しいと思った。(2名)</li> <li>文献の収集内容が今一つ適切でなかったように思われた。</li> <li>パソコンでの作業はよいと思った。しかし周囲にそのような施設がないため今後活かすことは難しい。</li> <li>模造紙に貼るとき迷った。</li> </ul>
思考の整理のしやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>図に示すことで頭の中が整理できた。</li> <li>何回かすればもう少し思考がまとまると思う。</li> <li>難しい。多い。頭を使いすぎた。</li> <li>難しく考えすぎて思っていることがうまくまとめられなかった。</li> </ul>
思考の共有のしやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれの着目するポイントや方向性などが微妙に違うので、共有するのは難しかったが、じっくり聞くとなるほどと共感できた。</li> <li>6人それぞれの思いはあったが、必ず共通の部分があり、それにプラスアルファでそれぞれの意見が聞けた。</li> <li>共有するにはいい方法だと思った。</li> <li>行き詰まり、どうまとめていいか悩んだ。</li> </ul>
思考のまとめやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分でまとめたり、構成したりするのがとてもスムーズにいった。</li> <li>ついついあまり考えずに看護してしまいがちだけど、もう一度一つのケアに対する意義とか大切さを考え直すことができた。とてもいい研修だった。文献を引いたり考えたりすることがとても楽しかった。</li> </ul>
楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループワークの発表は楽しかった。</li> <li>一人でやるより相談できて楽しかった。</li> <li>みなで意見を言い楽しかった。(2名)</li> <li>グループで楽しかった。</li> <li>自分の理解度は別として、2日間の研修は楽しかった。</li> <li>発言できてよかった。やはりリハビリもどんなりリハビリのことなのか最初決めておく必要があったのではないかとということが分かった。</li> </ul>
満足感	<ul style="list-style-type: none"> <li>講義も演習も2日間集中して受けられた。他の病院の看護師さんたちと交流もできて普段職場では分からないことも聞けて本当に満足した。</li> <li>1回ではなく、2・3回とやってみて理解できると感じた。</li> <li>充実した勉強会だったと思う。</li> <li>2日目は特にみんなエンジンがかかった。計画書、発表がすばらしかった。そこに参加できただけで嬉しかった。</li> <li>6人のグループ分けがとてもよかった。体験者の方をリーダーとして、とてもスムーズにグループワークが進んだ。また、私自身は研究についても精神科経験も初めてのため、とても勉強になった。次研究をやらせていただくときが楽しみ。</li> <li>ラベルワークを初めて行ったので、一つ一つの作業がスムーズに進まなかった。</li> </ul>
自由記載	<ul style="list-style-type: none"> <li>私にはレベルが高すぎた。勉強不足だと思った。グループワークの発表はとても勉強になった。いい発表(アイディア)ができたところはどのようにしてそんなにいいアイディアができたのか見習いたい。</li> <li>刺激となり意欲が出た。</li> <li>2日間の研修を通し、大体のプロセスは理解できたように思うが、少し難しかった。文献検索の難しさ、大切さというものを感じた。研修のプログラムが少しハードだった。最後何とかまとめたが今後役に立てていきたい。</li> <li>時間も足りなくて中途半端な終わり方だったように感じた。でも今回の研修は必ず役に立てたいと思っている。</li> <li>研究は難しいと実感した。かなり、本格的に学問的というか看護の世界も進歩してきているんだなあと思った。</li> <li>時間のゆとりがないため研修について行くのに精一杯だった。私自身勉強不足だと感じた。</li> <li>文献検索にもう少し時間があり、アドバイスを頂きたかったが、内容からして仕方ないかもしれない。でも初めてラベルワークの方法を知り勉強になった。先生の助言や評価があって救われた。ありがとうございました。</li> <li>研修方法、特に文献検索等の情報を事前に公開していただけたら、予備知識等の準備を考慮することができ、心構えの上での準備ができ、もっとリラックスして研修を受けることもできたと思う。</li> </ul>

看護研究をデザインする過程にラベルワーク技法を用いることで、以下の効果を期待して行った。

- 1) グループワークへ参加しやすくなる。
- 2) 研究課題が洗練しやすくなる。
- 3) 知見を整理しやすくなる。
- 4) 研究課題・目標を共有しやすくなる。
- 5) 研究への動機付けとなる。

看護研究デザイン法の進め方および効果に関する評価は、11項目すべてにおいて、「良い」と評価した割合が最も多く、⑩満足感の項目を除く10項目において、半数以上が「良い」と評価している。以下に期待した項目毎に考察を加える。

#### 1) グループワークへの参加しやすさについて

ラベルワークのねらいとして、参加者一人ひとりの参加度を高めていくことがある。調査項目⑤グループワークへの参加のしやすさについて36名(80.0%)が「よい」と回答しており、「いろいろな意見が聞けてよかった」「皆が意見を出すことができた」「進めやすかった」等述べていた。ラベルワークは、メンバー全員がラベルを読むことで、自分が日々の看護実践の中で問題に思っていることを言葉にし、発言していく。これにより、メンバー全員の参加を高め、話し合いが活性化できたのではないだろうか。また、図解係・タイムキーパー・発表係など、一人一役全員が役割を持つことで、より参加度を上げることができたと考える。このように、ラベルを用いたことで話し合いを活性化する「場づくり」ができた。その他の「場づくり」として、精神科看護という同じ領域で同じテーマに関心を持ったメンバーを集め、しかもそれぞれの職場が違うメンバー構成にするよう配慮した。これにより、関心は同じところにあるのに、置かれている環境や事情は異なっているため、違った視点で検討ができ、より一層意見交換を活発にしたと考える。

#### 2) 研究課題の洗練化のしやすさについて

調査項目⑦思考の整理のしやすさ、⑨思考のまとめやすさについて、いずれも28名(62.2%)が「よい」と評価しており、「図に示すことで頭の中が整理できた」「まとめたり構成したりするのがとてもスムーズにいった」などの意見

がみられた。考えをラベルに書き表し、それを目と手で操作しながら図式化していくことにより、問題意識から研究課題へと洗練しやすかったのではないかと考える。一方で5～6名(11.1～13.3%)は「わるい」と回答し「難しく考えすぎて思っていることがまとめられなかった」といった意見もみられた。個々の努力として表現することのトレーニングや、メンバー間で大きく意見の違いがみられた場合の調整などが必要であると思われた。

#### 3) 知見の整理のしやすさについて

調査項目⑥文献の整理のしやすさについて、24名(53.3%)が「よい」と回答しているのに対し、10名(22.2%)が「悪い」と回答していた。「文献検索のためのキーワードが難しかった」「文献のまとめ方が難しかった」「収集内容が今一つ適切でなかった」「模造紙に貼るとき迷った」など、多くの問題が述べられた。検索にあたりキーワード探しの問題、文献ラベル書きの際の要点抽出の問題、既知の整理の際のカテゴリー化の問題などが考えられた。これは進め方の問題ではなく、文献検索の仕方を理解すること、文献を読みこなす力をつけることが必要ではないかと考える。「文献の選び方、読み方の難しさを痛感した」といった意見もあった。このことより、問題意識や関心を持った領域に関して、ある程度学習し知見を得ていることが、効果的に文献検索を進めるのに求められるのではないだろうか。

一方、「時間のゆとりがない」「文献検索にもう少し時間が欲しかった」など、文献検索の時間の設定のしかた、初めての方法でとまどいがあるであろうこと、などを考慮していく必要が課題として挙げられた。「楽しかった」割合が高いのに「満足感」の割合が低かった要因の一つに、時間切れの問題が考えられる。後半特に時間の不足が生じ、柔軟に時間設定を変更したり配慮したが、それでも不全感を残す結果につながったのかもしれない。

#### 4) 研究課題・目標の共有しやすさについて

⑧思考の共有のしやすさについて、31名(68.9%)が「よい」と回答しており、「共有するにはいい方法だと思った」と述べていた。また、メンバー間の意見の微妙な違いが見えたことにつ

いて「共有するのは難しかったが、じっくり聞くとなるほどと共感できた」「それぞれの思いはあるが、必ず共通の部分があり、それにプラスアルファでそれぞれの意見が聞けた」との意見がみられた。これは、それぞれの意見をラベルに書き表し、目の前に提示したからこそ見えたことではないだろうか。共同研究者間で意思統一できたつもりでスタートしても、データ採取や意味づけの過程でズレが表面化することがある。メンバーそれぞれの微妙な違いを理解し、研究目的を本当に共有することがよりよい研究には必要であり、ラベルワークは研究者間の研究課題や目的を共有しやすい利点があると考えられる。

#### 5) 研究への動機付けについて

その他の記載に「次研究をやらせていただくのが楽しみ」「刺激となり意欲が出た」「今回の研修は必ず役立てたいと思っている」などの意見がみられ、少なからず研究をしてみたいという動機づけになったのではないかと考える。

## VI. 終わりに

今回は梶谷が看護展望において紹介した「拡大図解法を用いた看護研究計画立案支援プログラム」(梶谷, 2006)を、連続した2日間の研修用にアレンジし、看護研究デザイン法として考案し実施した。時間的に可能であれば、実際に研究計画書に書き落とせる内容まで、ラベルワークしながら整理できると、よりラベルワークの効果が確認できたのではないかと考える。

また、知見の整理の段階において、今回は時間の都合上、文献ラベルを整理した段階までの図解を用いた話し合いにより、研究目的・方法の選定を行った。本来ならば、文献ラベルを整理した後、「明らかにされていないこと」をラベルに書き出し、その中から研究目的を絞り込んでいくと、よりわかりやすかったと考える。

今後はラベルワークを用いて研究計画書を作成するまでのプロセスを時間設定も含めて手順化し、初心者でも楽しく研究計画が立案できる方法を検討していきたい。

## 文 献

- 林義樹(1994): 学生参画授業論—人間らしい「学びの場作り」の理論と方法—, 学文社, 東京.
- 林義樹(2002): 参画教育と参画理論—人間らしい『まなび』と『くらし』の探求—, 学文社, 東京.
- 林義樹, 金城祥教編(2004): 看護の知を紡ぐラベルワーク技法—参画型看護教育の理論と実践, 精神看護出版, 東京.
- 梶谷みゆき, 長崎雅子(2006): 拡大図解を用いた看護研究計画立案支援プログラム, 看護展望, 31(6), 93-99.



## The method for designing nursing research using the label work technique

Teruko ISHIBASHI, Minae AGO, Miyuki KAJITANI, Keiko TAKECHI\*<sup>1</sup>,  
Mikiko TAKANO\*<sup>2</sup>, Natsue INAMOTO\*<sup>3</sup>, Mineko MATSUBARA\*<sup>4</sup>,  
Hitomi KAWAHARA\*<sup>5</sup>, Noriko MIHARA\*<sup>6</sup>, Noriyo YAMASAKI\*<sup>7</sup>,  
Sanae NOTSU\*<sup>8</sup> and Miyuki KODAMA\*<sup>9</sup>

### Abstract

As a method for designing nursing research, we used a seminar to study the label work technique in nursing. We asked 47 participants who attended the seminar to fill out an anonymous questionnaire and 45 participants answered the result showed that they favorably evaluated the following items: the method is easy to participate, to wrestle, and to arrange the idea, to share ideas with other members. We found that time management for literature review and a deeper understanding of the procedure both require further examination.

Key Words and Phrases: label work technique, designing nursing research

